

## 団長の独り言

「頼れる・舞台監督」

とくに大きな問題点もなく、場当たりはとっても順調に進む。

それもこれも、照明さん、音響さんが優秀で私の意図するとおりに一発でバシッ！と決めてくれてるって大きいけれど、なんととっても、やはり舞台監督の高橋さんの仕切りが素晴らしいから。

彼との付き合いも、もう10年以上になるかもなあ。早いなあ。

彼はつねに冷静で、焦らず、イライラしたところも見せず、何よりも私の癖と性格をキチンと把握した中で進行し、どんなにタイトなスケジュールであろうともサラリとこなしてしまう。

彼は日本一の舞台監督だと思う。

いやほんとうに。

私がプロの役者としてガンガンやってきた頃や、大道具の仕事をしていた頃、そして劇団ふあんハウスを設立してからも何名もの舞台監督さんと接してきたけれど、高橋さんのようにスマートで仕事が早く、仕切りの上手い舞監さんはいなかった。

稽古場では、演出家であり劇団の代表でもある私が色々仕切っているけれど、劇場入りしてからは、舞台面での総責任者は舞台監督が担うのが通例。

舞台監督さん次第で、公演が成功するか失敗するか大きく左右する。

これまで私が観て来た舞監さん達の中には、高圧的で、威張り腐っているわりには、自分じゃ全然動かない人とか、あるいは照明、大道具、音響さんとの信頼関係が薄い人で、その舞監さんの仕切りの悪さに業を煮やした大道具の大将がどうとう切れてしまい、舞監さんの胸ぐらをつかんで、「おらあ！いい加減にせーよ！」なんて現場を目撃したこともあった。

あとは、これは設立して4、5年くらいまでの劇団ふあんハウスでの事なんだけど、素人が舞監をやっていた時期も結構あり、私が舞台監督を兼ねていた時もあった。その時期の劇団ふあんハウスの仕込みは、休憩も昼食休憩もほとんどなかった。

でも、それが「仕込みってものだ！」という感覚で、休憩をとらないのが当然だという認識でみんながやっていたが、ある時から、舞台監督さんもプロの方にお願ひしましうよ：って事になって、お願ひしたいはいいが、確かに多少の休憩時間は確保してくれるような仕切りにはなつたけれど、その方とは、どーも波長が合わず、結局1回限りでお声を掛けるのを辞め、さてはて次の作品は、どうしたものか？と困っていると、当時ゲスト出演していた竹内の兄貴（竹内一善）が、昔からの俳優仲間、今回「座長」役として大活躍して下さった堀越さん（堀越健次）に相談してくれて、堀越さんのお弟子さんである高橋さんを紹介してもらったのが、彼どのお付き合いの始まり。（堀越さんは、プロの俳優であると同時にとても優秀な舞台監督さんでもある。）

あれから十数年、ご縁というのはありがたいもので、今回はその堀越さんは役者として参加して下さいさる。

なんとも不思議な感じだ。そんな事を思いながら、舞台建て込みチームが朝のミーティングを行う部屋にひよいと顔を出せば、おや？堀越さんの姿があり、以下は高橋さんと堀越さんの会話。

高橋「あれ？ほりさん、手伝ってくれるんすか？」堀越「（微笑みながら）そりゃー（劇場に）いるんだから、何もしないってわけにもいかんだろう（笑）」高橋「マジっすか！（にやける）じゃ俺のガチ貸貸しますよ（笑）」堀越「いらねーよ！」（一同、大爆笑）※（ガチ貸：大工道具の入った腰につける道具袋）

こんな会話をしている師弟の二人が、すごく頼もしく思えた。

実際、作業をしている様子を客席から眺めさせてもらったけれどこの現場での親分が、弟子の高橋さんだという事をちゃんとわきまえている堀越さんは、作業中は決して出しゃばらず、それでいて手元（助手）である劇団メンバーには的確な指示を出す。そんな師匠の前で、立派な仕切りをしている高橋さん。二人ともかっこよかったなあ。

あつ！話を場当たりに戻しますね。そんな師匠が役者としている現場でも高橋さんは、いつもの調子で順調に場当たりを進め、たけもっちゃん（竹本和弘）演じる「売れない作家・庄平」の登場シーンとなる。

目のみえないメンバーが、稽古場とは環境も距離感も全然違う本舞台で、芝居しながら動き回るためには、巨大にそびえ立つ舞台セットの位置関係や、置かれているテーブルや椅子、そして舞台袖までの距離感から舞台そのものの大きさまで、全てを完璧に頭の中に叩き込まなきゃ完璧な芝居を行う事が出来ないの、目の見える役者以上に場当たりでは全神経を使う。

ましてや、たけもっちゃん演じる「庄平」は、「目のみえる人物」を演じなきゃいけないので、白杖なし、手探りもなしで、スタスタと歩いて出てこなきゃいけない。

仕込みの合間をみて、舞台セットの位置関係を何度も確認するたけもっちゃんの姿は目にしてはいたが、なにせ彼にとっては十数年ぶりの舞台。

どうかな？って思ったけれど、場当たりでの彼の動きは素晴らしく、全く問題なく一発でビシッ！と決めてくれる。

稽古中での積極的な芝居もそうだけど、このあたりも、さすが！竹本和弘！

こうして「庄平」絡みのシーンも、全く問題なく、その後も場当たりは順調に進み、さあ！もう一丁と思っていたら、舞監の高橋さんが、「はい！では今日はここまでです」というので、「えっ？」と思ひ、時計に目をやれば、おっと！もう21時10分、退館時間20分前。

こうして長い長い仕込みの1日が終わり、明日の初日に備えるのであります。